

ラフカディオ・ハーン

## 小泉八雲、「ジオ」へのまなざし

### はじめに

#### ・「ジオ」の視点でよむ文学の提唱

作家にとって自然を描くことは極めて重要な意味を持つと言われる。小泉八雲は今から130年前の松江に滞在し、五感でとらえた山陰地方の風土と文化を克明に描出した。ジオの視点から文学を読み直すことで、文学への新しい意味づけ、すなわち地域資源として文学を活かす可能性を模索することができる。また、「島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク」の意義を裏付け、来訪者の楽しみ方を拡げることにつながる。

#### ・代表作『知られぬ日本の面影』の意義

「松江や出雲ほど、直接見たことのない人たちに熟知されている都市や地方は、ほかにちょっとあるまいと思う。（中略）これほど完全な旅行ガイドブックをもった地方は世界に稀であろう」

（P.D.パーキンズ「松江とハーン管見」『風土』第3冊、1951年）

→P.D.パーキンズは『ラフカディオ・ハーン書誌(Lafcadio Hearn: A Bibliography of His Writings)』の著者。上記引用文は、八雲が山陰の魅力を描いた『知られぬ日本の面影(*Glimpses of Unfamiliar Japan*)』が初版だけで26刷を数えるベストセラーとして世界で広く読まれたことを示唆する。

### 1. 小泉八雲基本情報

- ・英語名 Patrick Lafcadio Hearn（小泉八雲 / 1850-1904）
- ・松江滞在は1890年8月30日～1891年11月15日までの、約1年3ヶ月
- ・作家・文学者・教師・ジャーナリスト・民俗学者など多面性をもつ
- ・ギリシャ（イオニア諸島・レフカダ島）生まれ、イギリス国籍（アイルランド人）。2歳以降、アイルランド・イギリス・フランス、そして19歳でアメリカへ移民しジャーナリストとしてシンシナティ、ニューオーリンズで活躍。カリブ海のマルティニーク（フランス領の島）滞在を経て1890年4月に日本へ。島根県尋常中学校・師範学校（現、松江北高校および島根大学教育学部）、熊本第五高等中学校（現、熊本大学）、帝国大学文科大学（現、東京大学文学部）、早稲田大学で英文学を教え、生涯で30冊の著書をのこす。
- ・1896年2月に小泉セツと結婚し日本へ帰化。日本で191番目の国際結婚。
- ・約30冊の著書。（言語はすべて英語）文学のジャンルは、翻訳、ルポルタージュ紀行、小説、随想、再話文学など。
  - 地球半周を超える片道切符の人生で得た異文化体験や母との訣別・左眼失明・赤貧・移民などのカタストロフィで「オープン・マインド」なまなざしを醸成したか。

### 2. 八雲の『知られぬ日本の面影』〈*Glimpses of Unfamiliar Japan*〉にみる「ジオ」の風景

（日本語は池田雅之氏訳『新編日本の面影』I・II（角川ソフィア文庫）より）

以下に、八雲の代表作『知られぬ日本の面影』からジオにつながる八雲の記述を引用する。

#### （1）宍道湖の落日

日本でみる落日は、熱帯で見るとは違う。日本の陽光は夢のように穏やかで、その中にはどぎつい色彩は見られない。この東洋の自然の色には強烈なものを感じさせるものがない。海を見ても、空を眺めても、色彩(color)というよりも色合い(tint)とでも言った方がいいような、霞むようなほのかな淡い色調を感じるだけである。すばらしい日本の染色を見ればわかるように、この民族の色彩や色合いに対する洗練された趣味には、けげんばしいものがなにもない。それは、この国の穏やかな自然が、落ち着いた繊細な美しい色彩を帯びているところに、大きく由来しているからではないだろうか。

遠くは鋸状の青い火山系の山々の連なりに囲まれながら、私の目の前では、広大な湖が静かにまどろみながら輝いている。右手の湖の東の端には、町の最も古い地区が青灰色の葎の波を広げている。家々は湖

畔の水際までぎっしりと密集して建っており、家の床下まで湖水が打ち寄せている。(中略) はるかかなたの湖水が一番深まるあたりは、ことばにできないほどやさしいスミレ色に染まり、松林の影に覆われる小島のシルエットが、その柔らかで甘美な色彩の海に浮かんでいるように見える。しかし、近くの浅瀬のところは水の流れのせいか、深い所とは、くっきりと線でも引いたかのように様相が異なっている。湖岸に近い水面はどこも青銅色で、しかも、渋味のある赤みを帯びた金色っぽい青銅色にきらきらと輝いている。

そのほのかな色合いは五分おきが変わってゆく。なめらかな玉虫色の絹布のように、色合いと陰影とを驚くほど移り変えてゆくのである。

Cf. マルティニークの夕陽 (『仏領西インドの二年間』(恒文社) *Two Years in the French West Indies* <平井呈一訳>より)

……今これを書いているのは、ちょうど日の入り時で、色彩の魔法が盛んに行われている最中だ。入江の方へひらけている狭い急な坂道を見下ろすと、紫ばんだ空の下、はてしもないオレンジ色の光を受けて、完全な緑色になった海の上に、汽船の動かぬ影絵がくっきりと見えている。(「神々の国の首都」)

- ・マルティニーク(カリブ海の島)と比較してみた、穏やかで湿度と陰を孕んだ風景。→ tint vapor toned
- ・「風景のもつ陰」と「自らのもつ陰」とが響きあい、居心地の良さに変わる。
- ・生誕地レフカダの「瀉の風景」が体内に刻まれていたか。
- ・宍道湖にみる「陰」と「移ろい」の豊かさが日本文化の特色を形成することを感得する。

Cf. 「移ろい」に関し、古くは、鴨長明は『方丈記』で人と住処を、絶えず流転する「ゆく川の流れ」になぞらえ、松尾芭蕉も「不易流行」(移り変わることこそ天地不変の恒常の原則)という言葉で説明

## (2) 加賀潜戸

洞窟の入り口は、広くて高さもあり、光に満ち、下は岩床ではなく、海が広がっている。舟がその中をくぐる時、6メートルほどの水底に、岩がはっきりと見えた。水は、空気のように澄み渡っている。あきらかに人類の歴史よりも数十何万年も古い歴史を持つ岩屋だが、新潜戸と呼ばれている。

これほど美しい洞窟は、とうてい想像できない。海もまた、偉大な建築家だぞといわんばかりに、そこに畝や綾模様を作り、その巨大な作品に磨きをかけている。入口の円天井は、高さ水面から6メートル、幅は4.5メートルはあるだろう。その天井から壁までの岩肌を、何億何兆という無数の波が、これほど滑らかになるまで洗ってきたのである。奥へ進むにつれ、洞内の天井は着実に高くなっていき、水路の幅も広がってくる。すると思いかげず、頭上から落ちてくる水のシャワーの洗礼を受けた。この清水は「新潜戸さんのお手水鉢」あるいは「御手洗」と呼ばれている。(中略) 舟が進む中、突然、船頭の婆さんが舟底から石を取り上げ、舳先を強く叩きはじめる。虚ろな音が、洞内中に雷鳴のごとく、木霊を繰り返す。すると次の瞬間、一気に光の束が射し込んできた。(中略) この大きな洞窟の向こう、何キロも続く紺碧の海の彼方に、岩の間から美しい緑の湾曲する浜が見える。われわれは入ってきた洞口に向かい合う、潜戸への三番目の入口へ進み、神と仏の住まう所へと入っていった。この岩屋は神道、仏教の双方から聖地と信仰されている。ここで洞内は、高さも幅も最大の大きさになる。天井は海拔12メートル、壁と壁との間は、9メートルはあるだろう。右手の上方、天井にほど近い場所に、白い岩が突出していて、その岩の上の穴から、岩とおなじように白い水が、たらたらとしたり落ちてくる。

これが伝説の「地蔵の泉」で、死んだ子供たちの亡霊が飲むお乳の泉とされている。(中略)

この土地の人々の不思議な想像力の中には、ほかの国でも同じような例がたくさんあるように、水の世界と死者の世界との間に、なにかしら神秘的で畏怖の感覚を呼び覚ますつながりがあるようだ。そのような原始的な考え方が今も残っているのではなからうか。その証拠に、盂蘭盆の後、7月16日に精霊が藁の小舟で黄泉の国へ帰っていくのも、やはり海を渡っていくのである。精霊舟を川へ流すのも、湖や運河に灯籠を浮かべ、精霊の行く手を照らすのも、また愛する子供を亡くした母親が、わが子を偲び、地蔵の絵のついた百枚の小さな紙きれを水の流れへ放つのも、すべてはそうした信心深い行為の背後に、あらゆる水

は海へ流れこみ、果ては冥途へと続いてゆく、という考え方が漠然とながら存在するからである。  
〔子供たちの死霊の岩屋でー加賀の潜戸〕

- ・ハーンの潜戸訪問： 1891（明治24）年9月上旬、御津まで人力車、御津から手漕ぎの小舟で潜戸へ、吾妻楼（屋号：ヤマンソラ）に宿泊。
- ・独特の風景と霊場という精神的聖地への魅力
- ・海上他界観の確認  
→日本人の他界観には、死後魂が天へのぼるとする天井他界、海へ行くとする海上他界がある。両者に先立って、死後はず近くの山に魂が落ち着くとする山中他界という考え方が存在する。八雲は人間の魂は海に去来するという考え方に深く共感していた。

志賀直哉の言葉

私は青年会長が、聞いた事もない名士の色紙短冊をありがたがって、その下手な和歌や俳句を絵葉書に刷り込むのを自慢らしく話すのを苦々しい気持ちで聞いていたが、私はそんなもの作る位なら小泉八雲の書いた立派な文章があるからその翻訳をパンフレットにでも作る方が遙かにいいと本気になってすすめた。勿論、青年会長は八雲の名は聞いた事もなく、私の言葉には全然耳を傾けなかった。（志賀直哉「加賀の潜戸」<昭和34年>『志賀直哉全集』第7巻）→先駆的な、作家と文学の観光資源化提案

### （3）日御碕海岸

その海岸一帯は険しい峡谷をなしており、奇妙な裂け目や割れ目が所々にあって、不揃いな姿かたちをさらしている。その巨大な岩の塊は、海上から突き出ており、か黒い廃墟のような岩肌が、深海の中からさまざまな威嚇的な相貌を垣間見せる。時々、私たちの船は、この双方の岩間を走り抜けたかと思うと、岩礁の間の迷路をジグザグに迂曲しながら進んでゆく。

この小さな船が、右、左と迅速かつ巧妙に舵を取るのも、船そのものが海路を知り尽くして、自分の知恵で運行しているかのように思われる。私たちは再びごつごつした奇妙な岩ばかりの小島の脇を通り過ぎる。水面下の岩の横腹には、海藻がびっしりと生えている。漁師たちは、こうした多角形の岩塊を「べつ甲石」(tortoise-shell-stones)と呼んでいる。（「日御碕にて」）

- ・西洋人初の日御碕訪問（自称）1891年8月の出雲大社滞在時に船で日御碕を訪問する。
- ・絶景と、天照大神と建速須佐之男命の二柱の姉弟神を祀る日御碕神社を世界へ紹介。

### （4）隠岐旅行でみた風景から

日本の風景には、ふしぎな粗野な暗い美しさが一ちょっと言葉ではいえない美しさがある。その秘密は、山容の異様な線、皺や凹凸の多い、峨々たる山脈の輪郭に求めなくてはならない。二つの山塊で、形が瓜二つというのはほとんどなく、かならずその一つ一つが、独自の変わった山容をもっている。かなりの標高をもっている山脈で、ふっくらした柔らかみのある線をもったものはほとんど稀で、大体の特徴は突兀としている点だろう。日本の山の美しさは、やはり「不揃い」の美しさだといえよう。きっとこの奇怪面妖な「自然」が、日本人に装飾における「不揃い」の価値という、独特の識感<sup>センス</sup>を吹き込んで、外国の芸術から自国の芸術を截然と区別させている「構図」という唯一の秘密をおしえたものにちがいない。

（平井呈一訳「伯耆から隠岐へ」）

→地形の特色が日本人の「不揃いの美学」という審美観を育む

### （5）島根県尋常中学校の地質学の授業

地質学の一連の授業では、湖付近の山々や、海岸地帯の絶壁などを訪れることで講義を補っている。生徒たちはそこで地層の形や岩に刻まれた歴史を目で実見して、自ら慣れ親しむように教えられるわけだ。宍道湖の盆状構造(the Basin of the lake)や松江近郊の自然については、ハクスリー\*の優れた教授

法に示されている方法に従って、地質学的に研究されている。「(英語教師の日記から)」

\*Thomas Henry Huxley(1825-1895)：イギリスの生物学者。地質学・鉱物学の分野でも大きな業績を残す。八雲は、ハクスリーの著書 11 冊を愛蔵していた。そのうち 1 冊は、生物学および地質学に関する講演を収録した内容。なお、八雲の個人蔵書 2435 冊の内、124 冊（英語本 109 冊、仏語本 16 冊）は自然科学の本→自然科学への関心

#### 4. 自然と人間のバランスを重視—八雲の自然と人間についての考え方

##### ●八雲の熊本時代の講演：「極東の将来」（1894 年 1 月）より

西洋と東洋の間の将来の競争において確かなことは、もっとも忍耐強く、もっとも経済的で、そして生活習慣のもっとも単純な者が勝ち残るだろうということである。コストの高い民族は結果的に全く姿を消すことになるだろう。自然は偉大な経済家である。自然は過ちを犯さない。生き残る最適者は自然と最高に共存で来て、わずかなものに満足できる者である。宇宙の法則とはこのようなものである。

(中島最吉訳、『ラフカディオ・ハーン再考—百年後の熊本から—』恒文社 所収)

→自然との共生とシンプルライフの必要性を強調

##### ●自然災害と自然開発

ひどい天候—洪水、家屋の倒壊、溺死。一連の自然災害の到来は、この国の森林伐採のせいだと思います。…東北地方の津波のことをご存知でしょう、一たつた 200 マイルの長さでしたが約 3 万人の命が奪われました。東部・中部地方では今も相当の地域が水に浸かっています。琵琶湖の水面が上昇し、大津の町は水浸しです」

(1896 年、ヘンドリック宛書簡)

→1893 (明治 26) 年 10 月中旬の台風による松江の水害に 50 円の義援金

→「生き神」(1854 年の安政南海地震の際の実話を物語化。のちに、リライトされ「稲むらの火」として教科書へ)の執筆

##### ●八雲が神戸時代に書いた記事「地震と国民性」1894.10.27 付、神戸クロニクル紙

・「戦争、火災、洪水、地震だけが、この絶え間ない再建の原因ではなかった。最も単純な原因は、長持ちするよう建てられた家がほとんどないことである。…最も神聖な神社—伊勢神宮でさえ、伝統の習慣によって二十年ごとに取り壊され、再建されねばならない。要するに、自然の不安定に人工的な不安定を対置させることにより、日本人は環境の厳しく荒々しい条件に対処してきたようである……日本が信じられないほどの短期間に、西洋が提供できたすべてのものを受け入れ、消化し、利用できたのは、その社会の非常に変わりやすい性質によってである。そして、それを利用することによって日本は、定期的に国土を荒廃させる恐ろしい突然の災害から、より効果的に自己を守る手段をやがて見出すだろう。」

→自然災害が多発する日本の風土が、変化を受け入れる国民性を形成したと理解、遷宮もその象徴と示唆  
宍道湖の風景に見出した「移ろい」が思考の原点にあったのではないか。

→風土と人間性の相関についての斬新な仮説といえる

#### 5. おわりに：持続可能な共生社会をめざす動きとの関わり

・文学を社会に活かす：読者の鑑賞対象、研究者の研究対象、ファンの顕彰対象を超えて

・SDG's (持続可能な開発目標)の実現には、八雲のオープン・マインド (「他者 (異なる人種や文化) への公平で愛のある眼差し。西洋中心主義・キリスト教中心主義・人間中心主義の立場をとらない) なまなざしが必要か。

→ハーンのオープン・マインドは東洋と西洋、人と人、生者と死者をつなぎは「分断」と対極にある思考。  
(2020 年 11 月 28 日の南アフリカ・プレトリア大学の Webinar)